

本はいま

地元の内科医院でインフルエンザの予防接種。90分待たされ注射は3秒で終了。だがおかげで興味深い記事を発見した。それと合わせて「美術」に関する記事を三つ紹介する。

最初は少し詰めの待合室で読んだ「週刊現代」(12月1日号)のカラグラビア。閉鎖的で怖い病院を美術の力で明るく快適な空間へ改善する、ユネスコの国際プロジェクト「アート・イン・ホスピタル」を取り上げている。例えば、婦人科の診察台に乗る患者の恐怖をぬぐうべく天井に木の葉を描く。その際に1枚だけ枯れ葉や描き損じたような葉を紛れ込ませる。それに気づいた患者の多くは不思議に思っているうちに診察が終わる。実に計算された未完成アートだ。

続いて「週刊文春」(11月22日号)。作家の阿川佐和子氏と絵本作家の荒井良二氏の対談。荒井氏によれ

# 雑誌の美術特集



美術に関する記事を書いた各誌

## 才能に触れる喜び

は、天才的な絵を描ける年齢は小学3年ごろまで、4年になると手を動かさず「画用紙をはみ出さないように」などと頭で考え始めるとか。同氏は今、子供だったころの自分を喜ばせる感覚で自由に絵本を描いている。

最後は「新潮45」(12月号)。ピートたけし氏と多摩美術大学教授、西岡文彦氏のおそらく美術作品に魅了される心理には、美術家と職業への羨望(せんぼう)も含まれるだろう。その

の対談。バランスの良い画家はかえって後世に名前を残せず、偏ってどこか壊れた人物が時代をつくってきたとの見方が面白い。大人のバランス感覚は画家には無用の長物らしい。

自由にはみ出す、人物を間近に鑑賞できる喜びにほかならない。(雑誌タチヨミスト・橘しんご)